

磯辺秀俊編

『日本の農業経営』

渡辺 兵力

1

戦前は農業経営に関する個別研究論文はあっても、「一巻の書」のかたちのものは非常に少なかった。ところが、昭和二十一年頃から急に農業経営に関する教科書風、論文集、論考といった類の書物が続々と刊行された。とくにこの二、三年は毎年数冊に及ぶ農業経営書が出版されている。農業経営の実践的問題が農政上の重要な問題分野になり、また農業者も単なる農業技術改良問題だけでは満足できなくなり、農業経営改善をどうするかということに関心がもたれるようになってきた。更に戦後、国や県の試験研究機関に経営研究がとり入れられて、その研究

成果が次第に成熟してきたということもあり、最近は一寸とした経営書ブームといえるような状態になってきた。

出版される書籍は多く、一方農業経営問題が農業問題の中で脚光を浴びてきたが、農業経営研究そのものが問題解決の場において十分に力を発揮しているかどうかということになると、なお議論の余地がある。ともあれ、農業経営研究の占める重要性は益々重くなりつつあることは確かだといえよう。

最近の農業経営研究の研究態度或は問題認識において、かなりはつきりした二つの立場がみられる。そのうちの一つは、農業経営問題をあくまでも個別的生産組織体の問題と理解し、個別経営の合理的在り方を究明していこうとする問題意識をもつ行き方である。この立場に立つ近年の研究は、いわゆる農家簿記・経営簿記の分析を中心とする経営研究の流れと研究担当者の系譜は直結しないかも知れない。しかしその研究方法なり問題意識という点では、日本の農業経営研究の流れの中で一つの位置を占めていたといつてよい。簿記分析の方法から発展したいわゆる経営計画論（診断・設計）的研究を中心とする方向が、これである。農事試験場における経営研究は大体においてこの流れに沿って行なわれてきていたといえよう。こうした分野の研究成果の一つのケルンとして、農林省振興局研究部監修による「農業技術年刊」の一つにまとめられた『農業経営編』をあ

げることができよう。

経営研究におけるもう一つの立場は、農業経営は農業生産を担当する生産単位であり、その限りにおいて私経済現象であるが、それは各経済段階における国民経済を構成する一細胞でもあるから、経営を或は経営問題を国民経済との関連において捉えるということを軽視してはならないという問題意識を強調する。この立場からの経営研究も過去において決して少なくはなかった。具体的な問題の捉え方には差はあったとしても、いわゆる農業経営実態調査法に依存した農業経営研究の多くは、経営問題をいわゆる個別経営の外部的諸条件との関連で説明していこうという方法をとっていたといえよう。ここでとりあげようとする『日本の農業経営』は後者の流れに属する研究の最近における代表的な書物の一つといつてよからう。

2

本書は純然たる論文集である。東大の磯辺教授の監修の下に、十一人の経営研究学徒が各テーマを分担して執筆している。このようなスタイルの経営学研究書には、本書の執筆者の一人である金沢助教（東大）が共編した『農業経営学の基礎理論』（時潮社版）がある。本書の編集過程の事情は承知していないが、監修者の執筆になる序文から推察する限りでは、『日本農

業の曲り角』といわれる激変期における農業経営問題を解明しようという意図の下に、現在の重要課題を共同して検討し、それを磯辺教授門下の若い研究者がそれぞれ分担したものと思われる。したがって、論文集ではあるが、全体として課題のとりあげ方には一貫性があり、また根本の問題意識は各執筆者とも同じ地盤にたっているものと理解される。その意味で本書は単なる論文集ではなく、執筆は分担されていても、本書全体は経営研究なり、農業経営問題意識なりに関して一つの主張をもったものといえよう。

次に、本書の内容を章節の構成をもって示しておこう。

序章 日本農業における経営問題、第一章 家族農業経営の特質、第二章 水田と畑の土地利用、第三章 経営規模と集約化、第四章 日本農業機械化の特質、第五章 有畜農業、第六章 農業経営の共同化、第七章 農業経営と集落、第八章 農業経営と階層、第九章 農業経営と流通、終章 構造改善の若干問題、

以上、各章の表題をみた限りでは、今日の日本農業における経営問題のトピックが殆どとりあげられている。第一章は家族経営の分析であって、いわば日本の農業経営問題の土台或は出発点に当る問題で、これを扱わねば先に進めないといつてもよい。そして第二章で組織論、第三、四章で規模論を扱い、第五、

六章は今日の課題がとりあげられている。表題だけでいえば、第四・六章の問題は最近のあらゆる農業経営書が同じ問題を扱っており、その意味では同じ表題で問題がどのような角度から検討されているかという点を中心にして、他の経営書との比較を試みると非常に興味があふれる。第七、八、九章は、いままでの類書があまり扱ってこなかった問題であり、本書の問題意識の特色の一つとみてよい問題である。

このような構成の本であるから、一つ一つの論文について書評をする必要があるが、それは到底許されないもので、本書に共通した問題意識の問題を中心として、二、三の点を述べてみたい。

3

序章で、農業経営を「単一なる経営主体の意志によって秩序づけられる農業生産の組織体」とみ「したがって経営者の自発的な合理性の追求、その主体性が重要」であるとし、「その限りでは私経済の問題であるが、それは国民経済の機構の中において行なわれ、農業経営はこれを構成する個別経済、いわば細胞として、国民経済の総生産を分担し国民経済的機能を果している」。すなわち、「私経済的側面と国民経済的側面の二面をもっている」というふうに理解している。したがって、「農業経

営の問題は、私経済と国民経済の相互交渉の場としてみられ、両者の矛盾、その調和が常に問題となる。こうした問題を意識経済の主体的活動として扱えようとするところに、経営問題がある」と述べている。これが本書の農業経営問題に対する基本的問題認識の態度である。そして、農業経営的思考として、次の諸点を重視している。第一は経営の持続性、第二は経営構造、第三は経営主体の性格、第四に経営群、これである。

第一の「持続性」という点は多くの説明を要しない問題であろう。しかし本書の第一章以下の個別課題の研究においてとくにこの問題を意識的に取扱っているところはみられない。問題としては、第一章「家族農業経営の特質」というところに、経営一般の持続性とはいささか性格を異にした、家族農業経営における持続性の問題が扱われていれば非常に興味ある問題を提示できたと思われるが、第一章は主として家族労働力の構成・利用の問題をいわゆる商品生産化との関連で扱っており、「持続性」の側面の新しいとりあげ方はみられない。また、第六章「農業経営の共同化」でも、共同化体制の持続性は極めて重要な視点と思われるが、ほとんど触れられていない。

第二の「経営構造」という用語は、基本問題以来一般に使われ出した言葉であって、今日のところ学術語として概念統一が十分になされていない。本書では執筆参加者が大体において用

語概念の統一をはかっているようにみられるが、実は、いうところの「経営構造」的視点で、農業経営問題を分析しようという意図が本書の一つの特色ともいえよう。第二章（土地利用）、第三章（経営規模）、第四章（機械化）、第五章（有畜農業）、第六章（共同化）、第八章（経営と階層）等の問題は、この農業経営構造という視点からの究明の対象になる問題群であろう。しかし、本書は結局、「経営構造」概念をその個々の構成要素に分解して扱ってしまっている。われわれとしては経営構造という新しい総合的概念の視点に立った、統一的分析を期待していた。すなわち、今日の農業進歩の課題がいわゆる「構造改善」にあるという意味からも、農業経営構造分析といった視点で日本の農業経営の解明があれば、本書の序章の問題意識をより鮮明に実証したものと思う。すなわち、経営組織・規模、集約化・機械化・有畜化・共同化といった問題を相互に関連させて捉えて、はじめて農業経営の構造的究明ができるのであろう。その意味で、本書の成果の次にわれわれの期待するものがあるのかも知れない。

第三の「経営主体の性格」という視点は評者の個人的問題意識では極めて重要な問題と思っている。少なくとも今日までの農業経営研究分野においては、いささか軽視されてきた問題領域である。その意味で、序章における問題指摘には同感を表し

たい。しかし、その問題が以下の各章において必ずしも十分に展開されていない。表題からだけでいえば、第七・九章において農業経営の主体性の問題或は経営者行動の問題が扱われることになると思われるが、やや期待に反した。第八章「農業経営と階層」は最初に問題点を展開しており、いわゆる農家（農民）階層論の経営学的取上げ方を述べている。すなわち、「階層」という概念は、もともと経営の分化による性格の質的ながいを問題にしようとするのであって、農業における資本主義の浸透に伴なう農民層の分解という観点でそれをとらえたものである。だが、従来の階層論は多く、資本主義と農業問題という全体的（国民経済的）立場にたつて、歴史的・長期的・発展的傾向を論じようとしたから、経営の内部の問題にまで立入って考察しようとすることは少なかった」と述べ、更に、「階層ということがこのような形でとらえられている限りでは、個々の経営の改善や技術導入といった経営の内部にまで立入った実践的課題を考えようとするとは直接的つながりはあまりもっていない」といい、従来の階層論は農業経営問題の解明には無縁のものが多かったという見解である。しかし、経営研究においても階層の問題を見捨ててはならず、「階層の問題も経営の質的な構造の分化とその発展の問題として考える必要がある」と主張している。そして、「階層ということをこのように生産者としての

性格（行動様式）の差、すなわち経営構造の差として理解すると、階層の問題としては、第一に現実それがどのように類型のにとえられ、どのような性格をもっているか、第二にそれが社会経済との関連の中で、相互にどのように影響しあい、どのような発展の条件と方向をもっているかを明らかにすることと考えられる」と述べ、階層の経営論の問題意識を提起している。評者は「階層」（階層性・階層構成・階層差）は個別経営の与件の一つと考えるが、同時に階層性は経営主体の類型とその行動様式を規制するものと理解しているので、本書の問題意識には大体において賛同したい。しかし第八章の扱っている問題は、主として在来の農業経営層の統計的分類であり、いわゆる経営主体の階層的行動様式の問題にはあまり触れられていないようにとれる。具体的に経営現象（生産行為）が行なわれるときに、「階層」という条件がどのように作用し、また階層的経営主体類型がどのように行動し、それが農業生産力の発展にどのように作用しているか、といった問題の究明がなされる必要があるのではなからうか。

以上のような問題は、第四の「経営群」という概念に立った視点につながる。本書の序章で述べられている「経営群」という概念は、最近の用語をもってすればいわゆる「協業的農業」の生産様式をもつ経営集団を指していると思われ、評者のかつ

て使った同じ用語の概念（拙稿「農業経営における集団」「農業総合研究」第9巻第4号、一四八頁参照）とはいささかちがうが、何れにせよ、個別経営の実践的研究の問題領域に経営集団の問題をとり入れることは極めて重要と考えられる。とくに、協業的生産様式を促進しようという最近の実践的要請からすれば、一層この「経営群」的視点は重要性を倍加してきた。

この問題に答えるのが、第七章「農業経営と集落」である。統計的「集落」概念（領域）と社会学的「部落」概念とは本来異なったものであり、むしろ、経営問題としては「部落」を問題にしなければなるまい。第七章では「農業集落」という用語で、「農業集落は生産・生活の場を共通にするということだけで結ばれた単なる地縁集団ではなく、その多くは生産力の低い発展段階に個々の農家がその生産・生活を共同で維持していくために必然的に形成され、その内部に血縁関係・同族関係さらに地主小作関係等の諸関係を強い絆として温存しつつ封鎖的な一社会として展開を遂げてきた共同体的集団である」と規定している。評者の用語では、このような農業集落の中で営まれる経営は必ず「経営群」を構成しているということになる。第七章全体の問題はその意味で古いかたちの経営集団の問題（集落的共同組織）が扱われている。そして「それが（集落的共同組織）が個別経営の自主的発展のための近代的な目的集団として

その機能を合理的にはたすか否かは、その部落構造如何にかかわる問題」であると結論している。果して合理化規制条件が部落構造だけにあるかどうかは問題であるが、第七章は少なくとも今日までの経営研究では比較的扱われていなかった問題点であり、本書の中でも注目してよい成果であろう。しかし、近代的なかたちの経営集団の問題にまで分析が進められていない点、序章の問題提起と関連させてみた場合にやや残念に思える。

経営主体と経営群との視点は、むしろ第九章の「農業経営と流通」においていろいろな問題が出されている。すなわち、第九章では農業経営主体の対市場行動を扱い、それを品目別に流通機構の概説のちに、具体的調査事例をもつて個々に説明されている。こうした研究は従来の経営研究では非常に少なかった。いうまでもなく、商品生産は市場生産であり、経営者（生産者）と農産物市場との結びつきの問題が、次第に生産の主要条件になってきつつある。その意味で第九章の扱った問題は今後一層多くの研究を積み重ねていくべきであろう。

4

以上、本書は従来の農業経営研究の二つの流れのうちの一つを代表する問題意識にたち、極めて重要な四つの視点を提起し、ほぼその線に沿って今日までの日本の農業経営の主要問題を要

約的にまとめたものといえることができる。個々の論説についてはなお議論の余地もあろうが、農業経営問題の現状を知るためには有益な労作である。しかし、扱われている問題はあくまでも現状であり、今後の問題ではない。その点は、本書の終章がいわゆる農業構造改善問題と経営問題との結びつきにおける主要問題点を、(i)企業化、(ii)経営規模の拡大、(iii)共同化、(iv)専門化、に要約して述べて、本書のしめくりとしている点でもうなすける。

ただ、最後に現状分析の場合にも問題を経営の発展、という視点をとり入れていけば、それが今後の経営問題にかなり具体的な課題を提起できると考えられる。ところが本書全体を通じての経営の動態的分析が、主として統計資料によるいわばマクロ的（平均的）扱いが多く、具体的な農業経営の発展の姿を本書の主張する問題意識にたつて追求していく、というところが少なかった点が心残りである。